

# 勝沼のブドウ畑及び

## ワイナリー群の文化的景観

調査報告書 概要版

甲州市教育委員会文化財課／編

## 目次

自然とともに生きる .....	2
水とともに生きる .....	4
生活のなかのブドウ .....	6
ブドウ郷の今昔 .....	8
地域に根ざしたワイン .....	12
人と物資が行き交う .....	14
文化的景観としての魅力 .....	16
文化的景観をかたちづくる特徴的なもの .....	20

### 凡例

1. 本書は、『勝沼のブドウ畑及びワイナリー群の文化的景観調査報告書』（甲州市・甲州市教育委員会 2019）の概要版であり、国及び県の補助金を得て刊行するものである。
2. 本書の作成にあたっては山梨大学大学院総合研究室生命環境学域菊池研究室の協力を得た。





勝沼地域は、主として砂岩、泥岩、粘板岩から形成される四万十帯に花崗岩類が貫入する地質を示す。そのため、山間部の砂岩・泥岩が多く分布するところが浸食され、川が運搬した山からの砂礫が堆積して谷口より下に扇状地を、さらに下に平地を築いた。扇状地は礫を多く含み、水はけの良い土地となった。それは、果樹栽培に適した土地にほかならない。

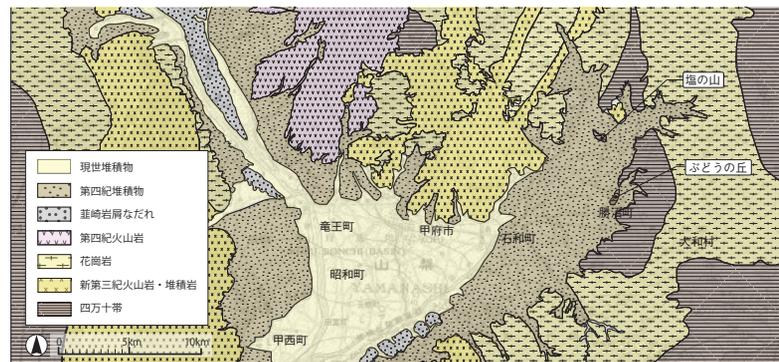
また、盆地特有の気温の日較差や年較差が大きく、降水量も少ない内陸性の気候に加え、東側に位置する笹子峠から吹き込む局地風「笹子おろし」は夜間の冷え込みを厳しいものとする。こうした条件が揃うことで、勝沼地域がブドウ栽培の適地となるとともに、山腹より西向きに盆地を見下ろせる見晴らしの良い地形となって景観に現れ出ている。

## 伊豆半島の衝突と勝沼地域

勝沼地域の地質の土台となる四万十帯は、秩父山系やその東の大菩薩山系などの主体を構成するものである。しかも、この四万十帯は日本列島に広く分布し、本州の太平洋側を九州から関東地域まで連続する地層群を構成する。

四万十帯は、山梨県付近において大きく屈曲している。これは、1,200万年前頃にはじまる伊豆－小笠原弧の、特にその前衛部（楯形山塊など）の衝突によって、徐々に屈曲が進行したものである。衝突開始の頃には、甲府盆地の西部では甲斐駒花崗岩が、甲府盆地北部では昇仙峡花崗岩類が四万十帯に貫入しており、勝沼地域周辺でも徳和花崗閃緑岩などが貫入している。そして、今から約百万年前以降に、これらの地層群は上昇に転じ現在の山系に成長してきた。勝沼地域の背後の高標高部もこの過程で山の姿を成したものである。

その後、これらの高標高域からの浸食・運搬作用によって、相対的に低標高の甲府盆地側に土砂運搬が活発になってきた。この過程で、御勅使川扇状地、一宮扇状地、勝沼扇状地などの規模の大きな扇状地が形成され、果樹栽培に適した水はけの良い土地が生まれた。



■ 甲府盆地及び周辺地域の地質図－①



■ ぶどうの丘及び周辺地域の地質図-②

塩山市街地と勝沼町東部の2ヶ所に四万十帯が飛び石で認識できる。塩山市街地のそれは「塩の山」であり、勝沼町東部のそれは「ぶどうの丘」である。これらの飛び石分布は、かつてはその背後に分布する横線地域の四万十帯と一体の地層として分布していた。

## 果樹栽培に適した気象条件

太平洋側気候でも沿岸部の東京に比べ、盆地気候の甲府、勝沼の気温較差が大きく、また勝沼のほうが甲府よりさらに気温較差が大きい。

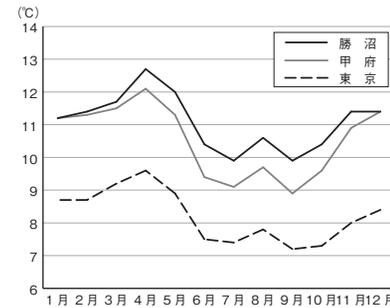
勝沼は、国内でもそう多くない 40°C 超えの記録をもつ地域のひとつであり、夏には日の最高気温が全国で最も高くなることもある暑い土地である。

しかし、山沿いという地形的な特徴から、笛子峠からの山風が日中の気温を下げる役割をしている。地元ではこの山風を「笛子おろし」と呼んでいる。降水量は、年間平年値で勝沼は 1080.9mm であり、甲府の 1135.2mm より少ない。

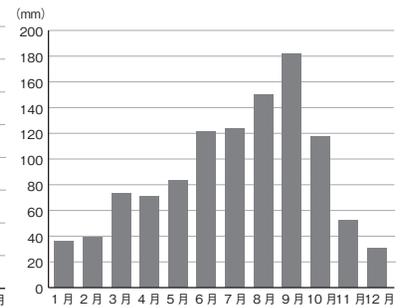
甲府盆地は全国的にみても少雨の地域だが、その甲府盆地の中でも、勝沼地域の降水量はさらに少ない。

また、日照時間は勝沼と甲府で大きな差はないが、いずれも全国の気象官署比較で全国トップクラスにある。

このように、昼夜の寒暖差が大きく、降水量が少なく、日照時間は長いというブドウなど果樹栽培に適した気候条件を、甲府盆地の中でも色濃くもっているのが、勝沼地域である。



■ 月別の日気温較差(平年値)-③



■ 「勝沼」の月別降水量(平年値)-④



勝沼地域では早くから深沢川又は日川上流部に堰を築き、水路を敷いて生活用水及び灌漑用水としてきた。この地域では、堰と水路を併せて「セギ」と呼んでいる。日川南岸では、川に平行して幹線となる水路を配し、水路網が築かれた。一方、日川北岸では、断崖上の最も高い位置に甲州街道が東西に敷かれ、沿道の町場に幹線となる水路を配し、田草川（北）に水を落とすように水路網が築かれた。こうしたなかで、近世から近代には水利条件の良いところは水田とされ、悪いところは畑地とされた。他方、河川は暴れ、ときに大水害ももたらした。明治40年代に起こった水害が地域に及ぼした影響は大きく、その後、勝沼地域では日川河岸に治水のための堰堤や水制群が国直轄事業として建設された。現在、水制群が建設された河岸一帯は一面のブドウ畑となり、水制もブドウ棚の下に受け継がれている。

## セギからの水が地域を潤す

勝沼地域は、水はけの良い扇状地であり、果樹栽培に適した一方で、灌漑や生活のための水の利用では苦勞をした。近世には、大字レベルでの水争いも頻繁に生じていたことが史料からもわかる。

こうしたなかで大きな役割を果たしたのがセギである。

勝沼地域はその中心を日川が流れ、また、日川の北側及び南側に2本の河川（いずれも田草川と呼ばれる）が西流しており、地形は西に緩やかに傾斜する。また、2本の田草川はそれぞれ100～150mの比高差をもって流れ、日川が形成する河岸段丘の南側断崖頂部からは田草川（南）に向かって上り斜面となり、北側断崖頂部からは田草川（北）に向かって下り斜面となる。こうした東西、南北方向の地形の高低差を利用してセギは敷設された。こうしたセギの一部は近世初頭の絵図でも確認できる。

## 水を治めた近代技術

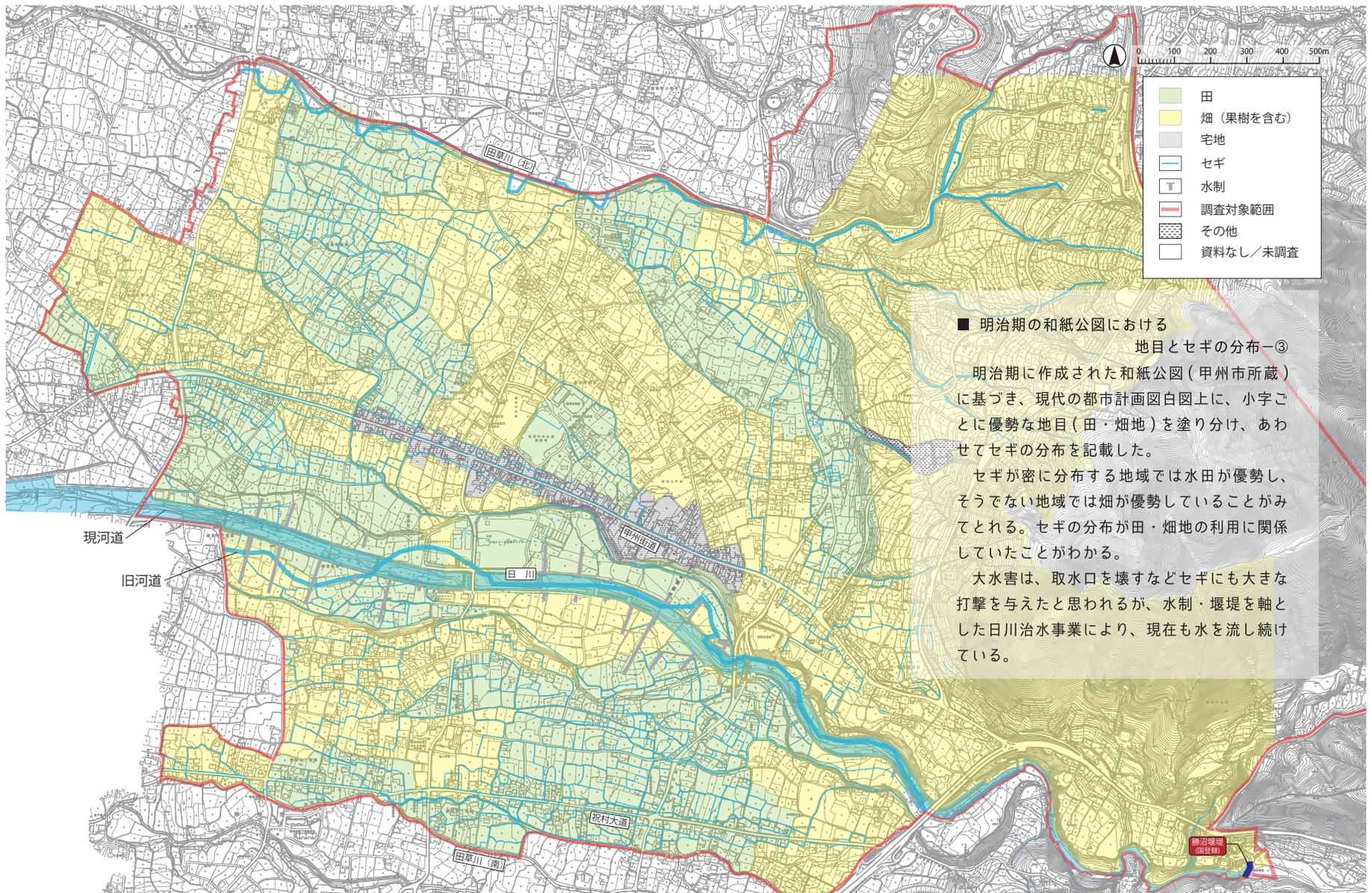
明治40年代の大水害によって、勝沼地域も甚大な被害を被った。水害後、大正時代には勝沼堰堤、日川水制という2つの治水施設が、国（内務省）直轄工事として日川流域に建設された。現在、水制が築かれた場所は一面のブドウ畑となり、水制の上にはブドウ棚が架かる。



■ セギは現在も農業に使われる①



■ ブドウ棚の下に延びる日川水制②



■ 明治期の和紙公図における  
地目とセギの分布③

明治期に作成された和紙公図(甲州市所蔵)に基づき、現代の都市計画図白図上に、小字ごとに優勢な地目(田・畑地)を塗り分け、あわせてセギの分布を記載した。

セギが密に分布する地域では水田が優勢し、そうでない地域では畑が優勢していることがみとれる。セギの分布が田・畑地の利用に関係していたことがわかる。

大水害は、取水口を壊すなどセギにも大きな打撃を与えたと思われるが、水制・堰堤を軸とした日川治水事業により、現在も水を流し続けている。



勝沼地域では、江戸時代に日川北岸の段丘上に甲州街道勝沼宿が整備された。勝沼宿は 甲州街道随一の規模を誇る宿場町であり、多様な商いが営まれていた。近代に宿場の機能は失われるが商業町として賑わった。とくに大正時代になるとブドウに関連する商いも登場した。戦後には観光ブドウ園が増加し、甲州街道周辺を中心に町家とブドウ園が混在する町並みが形成された。ブドウが生活・生業の中心に位置づく勝沼地域にあって、寺の境内で甲州種のブドウが栽培されるなど、独特の景観もみられる。また、秋にはもともとは大善寺の送り火行事であった鳥居焼がおこなわれる。大善寺で点火された「聖火」(松明)をもって中学生が町内を疾走する光景は地域の風物詩であり、地域では鳥居焼をみるとブドウシーズンの終盤を実感するという。

## 甲州街道沿いの町並み

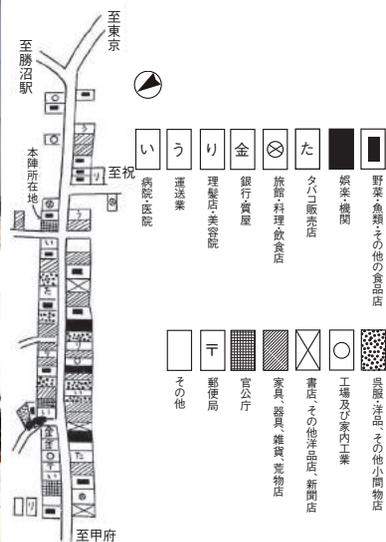
勝沼宿は元和4年(1618)の甲州街道における新規宿駅の制定によって宿場町としての歴史が始まる。本陣及び脇本陣付近に大規模な旅籠が集まる宿場町であったことがうかがえるが、近代には一帯の流通・往来の拠点として商家主屋や土蔵、旅館が建つほか、近郷の商店街として、製糸業、質屋、米穀肥料商、魚乾物商、呉服太物商など、多様な小売商店が並ぶ町となった。ブドウの需要の高まりの中で、町場においても敷地の背部等の余地に棚をかけてブドウ栽培がおこなわれていた様子がうかがえる。大正時代に入り、観光ブドウ園が登場することで、主屋を敷地奥に移す行為が勝沼宿内で数軒みられる。こうしたなかで、宅地とブドウ園が混じる現在の街道沿いの景観が形成されていった。



■ 鳥居平の麓に位置する勝沼宿-①



■ 敷地の余地にかげられるブドウ棚-②



■ 昭和35年(1960)の勝沼宿の町並み-③

## ブドウにまつわる伝統行事

勝沼地域では養蚕神の信仰がかつてはあり、その遺構としての蚕影山石碑が残る。神輿が練り歩く際の掛け声が「ブドウの豊作大当たり」となった（上岩崎）、ワイナリーにおける仕込みにあたって祈祷をおこなっている、かつぬまぶどうまつりでの収穫感謝祭の催行などが事例としてわずかにみられる程度である。

また、かつぬまぶどうまつりのフィナーレでは勝沼中学校の生徒（かつては青年団）が「聖火」（松明）をもって町内を一周し、最終的には鳥居平に駆け上がり鳥居形に点灯する。

もとは大善寺の送り火だが、無病息災やブドウの収穫に感謝する行事として地域で大切に受け継がれる。



■ 養蚕神である蚕影神社④



■ どんど焼きではブドウ枝を薪に使う⑤



■ ブドウ畑棚が浮かぶ鳥居焼⑥



■ 大善寺で住職により分火される聖火⑦

## 大善寺とブドウ

甲州ブドウ発祥の伝説をもつ大善寺は、境内でブドウを栽培し、ワインを醸造するなど、ブドウとの強いつながりがみえる。本尊の木造薬師如来坐像は「葡萄薬師」とも呼ばれ、ブドウを手にした姿がよく知られている。大善寺で行われる行事では、柏尾地区の行事も含め御神酒としてワインが奉納され、また、5月8日に執行される「大善寺の藤切り祭」は、「祭が終わればデラのジベ付け（デラウェア種のブドウにジベレリン処理をして種無しとする作業）が始まる」と、ブドウ栽培の始まりを告げる祭とされている。

大善寺とは関係ないが、大正時代に宮光園主の松本三良が祀った「ポルドウ神社」や、昭和56年（1981）に祀られた「慈幣天羅不動」も、ブドウ栽培に生きる人々との関係を知るうえで興味深い。



■ 境内でのブドウ栽培⑧



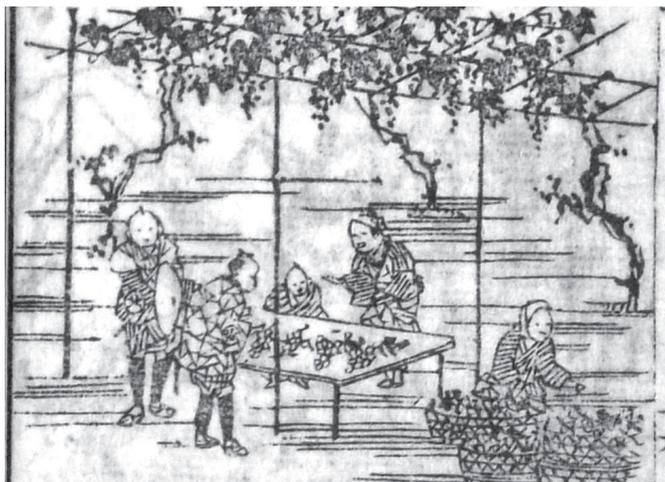
■ 一升瓶ワインの御神酒をふるまう⑨



■ 大善寺の藤切り祭⑩



■ 慈幣天羅不動⑪



甲府盆地では多くの果樹が栽培されているが、モモやスモモがほとんど混じることなく、一面にブドウ畑が広がる景観は、勝沼地域の大きな特徴である。

江戸時代中期には山裾や水はけのよい平地の一部でブドウが栽培されていた。例えば、扇状地の土砂堆積物が多く、水はけの良い上岩崎では、すでに正徳年間(1711～1716)にはブドウ畑があったことが絵図等から確認できる。

歴史的に栽培されている品種は甲州種などであり、棚栽培によっておこなわれてきた。甲州種は、現在でも醸造用の品種として重要であり、甲州ワインとして世界に発信されている。また、戦後の品種改良や栽培技術の進化、消費ニーズの変化により、栽培品種はデラウェア、巨峰、ピオーネ、シャインマスカットなど多種に及んできているが、棚栽培が踏襲されている。

## ブドウ栽培の遷り変わり

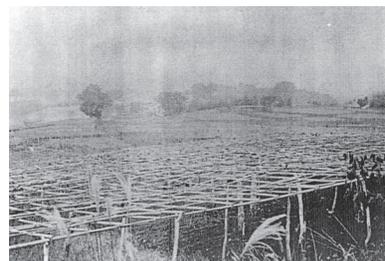
畑地は、水田・桑畑等がブドウ畑に変わるなかで合筆されて大規模化するなどの変化が生じた。しかし、ブドウ畑に転換してからは、急傾斜地のブドウ畑を支える石積み、畑の地割などはほとんど変化していない。

他方、栽培品種や技術、流通体制などは常に変化している。例えば、出荷の梱包は竹カゴから木箱、ダンボール箱へと変化した。ブドウ棚の材料も竹から針金、ステンレスへと変化した。近年では醸造用の西洋品種を中心に垣根仕立でもおこなわれている。

そうしたなかで、棚架けに美しさを求める農家の存在やブドウ栽培用農機具の取り扱いで国内外を牽引する農機具店の存在などは、ブドウ栽培の中心地としての勝沼地域の性格を色濃く表現したものと見える。



■ 鉄線棚に対する表彰状(若尾家)ー①



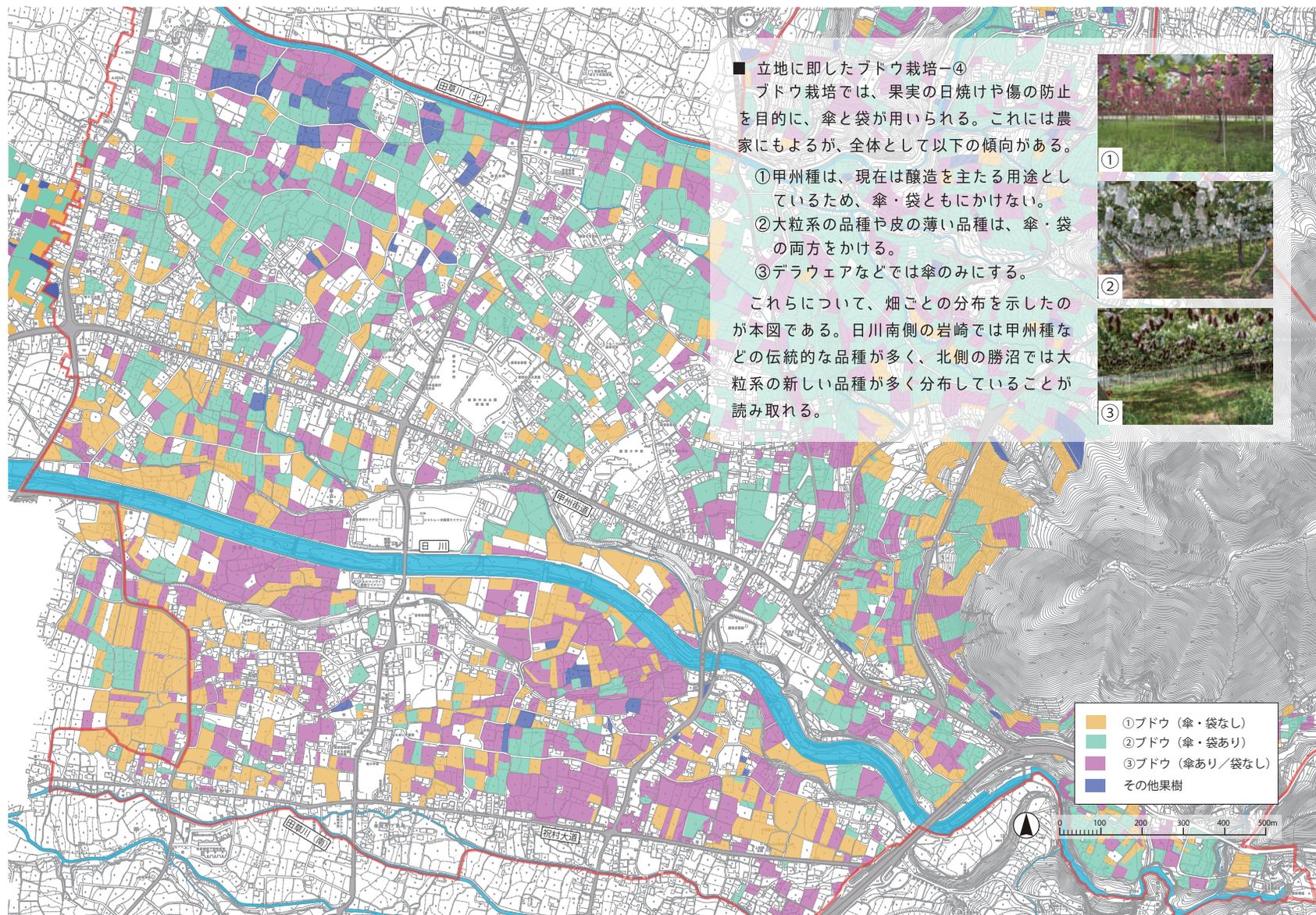
■ ブドウの竹棚(明治30年代)ー②

竹は棚材のほかブドウの収穫や出荷、あるいは観光客の持ち帰り時のカゴとして戦後に至るまで重要な役割を担い、カゴの職人もいた。

ブドウ栽培における竹の役割が衰退した現在だが、竹林は段丘崖など地域の随所でみることができ。



■ 段丘崖の竹林ー③



■ 立地に即したブドウ栽培④

ブドウ栽培では、果実の日焼けや傷の防止を目的に、傘と袋が用いられる。これには農家にもよるが、全体として以下の傾向がある。

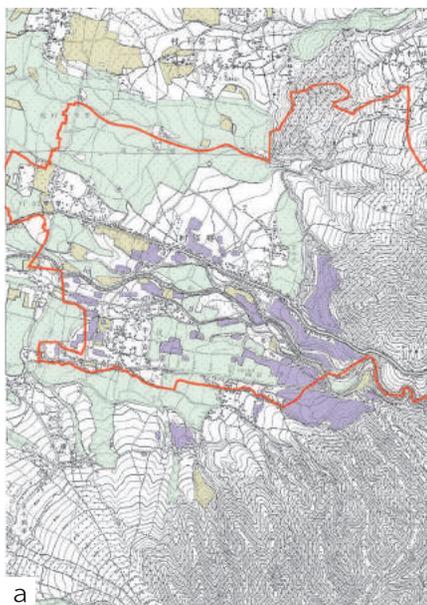
- ①甲州種は、現在は醸造を主たる用途としているため、傘・袋ともかけない。
- ②大粒系の品種や皮の薄い品種は、傘・袋の両方をかける。
- ③デラウェアなどでは傘のみにする。

これらについて、畑ごとの分布を示したのが本図である。日川南側の岩崎では甲州種などの伝統的な品種が多く、北側の勝沼では大粒系の新しい品種が多く分布していることが読み取れる。

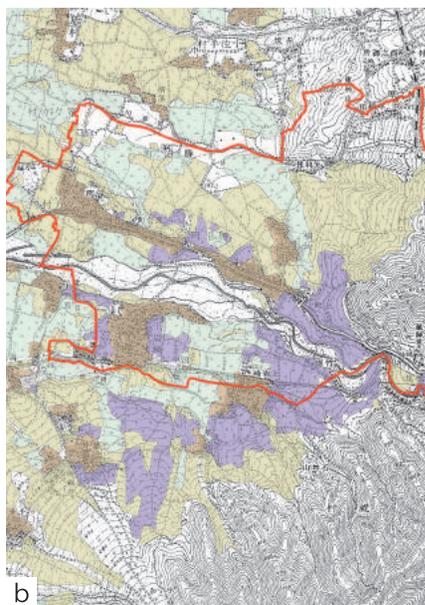


- ①ブドウ (傘・袋なし)
- ②ブドウ (傘・袋あり)
- ③ブドウ (傘あり/袋なし)
- その他果樹

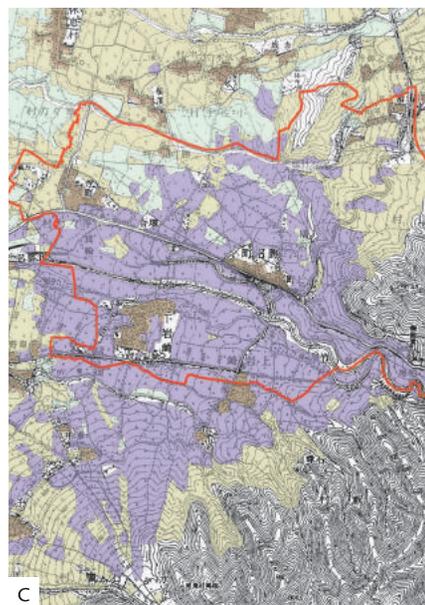




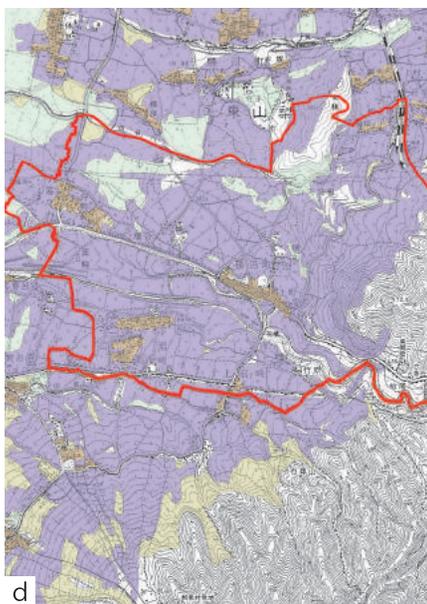
a



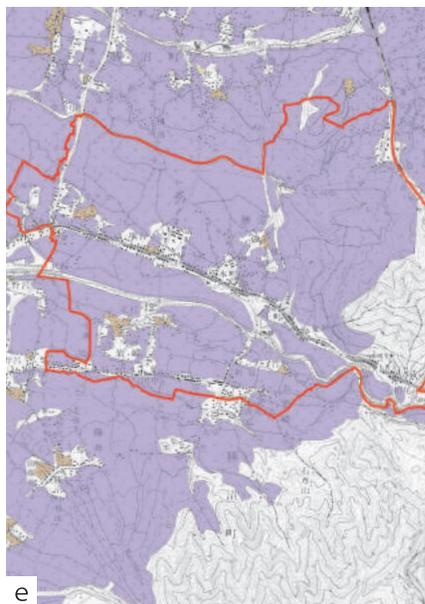
b



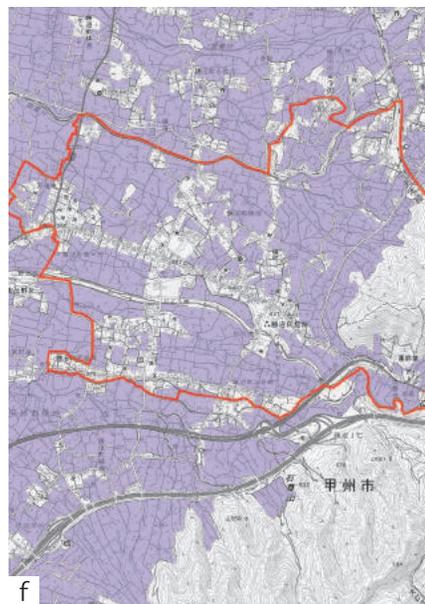
c



d



e



f

### ■ 勝沼地域におけるブドウ畑の広がり⑤

明治 21 年頃の図をみると、ブドウ畑は近世からの栽培地と被るようであるが、明治 44 年頃とあわせてみても、ワイン産業が興った岩崎地区や南側の山裾にまとまった広がりが確認できる程度である。それよりも、桑畑の拡大のほうが著しい。この頃は、中央本線開通や殖産興業政策の展開等で、新規開墾が進み桑やブドウの畑が増加した。昭和 4 年頃の図では、調査範囲内では北側に桑畑が残り、ブドウ畑がかなり広がっていることが確認でき、昭和 29 年頃には調査範囲内の畑はほぼブドウ栽培となったことが分かる。なお、『勝沼町誌』にある昭和 35 年度の「農産物種類別収穫面積」をみると、勝沼町内のブドウ畑は 54.6% を占め、他の果樹 7 品目はあわせて 11.3% とある。調査範囲である勝沼地区では他の果樹は 6 品目、岩崎地区では 5 品目と減り、他の地区と比べてもブドウの優位性が高い。よって、昭和 29 年頃の図までは「果樹園＝ブドウ畑」とみてよい。

昭和 49 年の図では、調査範囲外はブドウやモモが混在する状況だが、一面のブドウ畑という現在みられる景観は、この頃に成立したものと見える。また、平成 29 年の図では、宅地造成に伴いブドウを含む畑が減少していることが分かる。



<a> 明治 21 年頃 (1888)

<b> 明治 44 年頃 (1911)

<c> 昭和 4 年頃 (1929)

<d> 昭和 29 年頃 (1954)

<e> 昭和 49 年頃 (1974)

<f> 平成 29 年頃 (2017)

# 養蚕からブドウ・ワインへ

勝沼地域には、水を動力とする水車が水路に多く作られた。特に岩崎には街道沿いに多くの水車が並び、戦前まで主として製糸業の生業に利用されていた。

岩崎はブドウ栽培やワイン発祥の地として名高く、現在でも多くのブドウ畑、ワイナリーが密集しているが、明治時代の半ばから戦前にかけては勝沼地域のなかでも製糸工場が営まれる地区であった。

昭和4年(1929)にはじまる世界恐慌などの影響により、日本全体で製糸業は衰退に転じ、勝沼地域の製糸工場も急激に減少する。それとともに水車も役目を終え、次第に除却されていった。

戦後、勝沼地域では、昭和30年代には桑園面積、蚕飼育農家数ともに減少に転じ、昭和39年(1964)には桑園面積、昭和46年(1971)には蚕飼育農家がそれぞれ完全になくなる。こうした動きは、山梨県全体では蚕飼育農家数は昭和30年代後半から、桑園面積は昭和40年代後半からそれぞれ緩やかに減少するのに比べて際立って早いものである。こうして次第に、勝沼地域の基幹産業はブドウ栽培やワイン醸造へと転じていったのである。

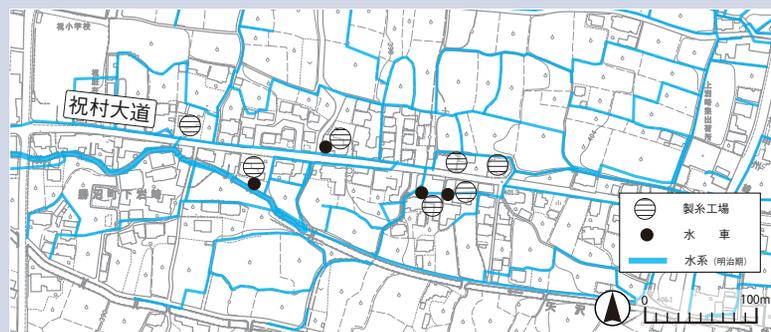
なお、岩崎の水車のひとつは戦後まで残され、小・中学生がそこに石を投げ込み、水車の回転によって鳴る「カタンカタン」という音を楽しんだという思い出話も地域には残されている。



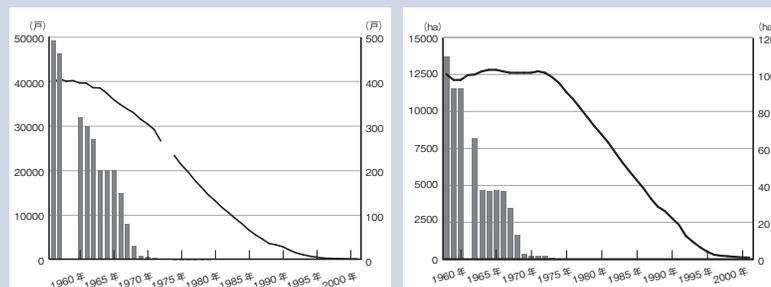
■ 甲州街道沿いの水車-⑥



■ 今も残る製糸工場跡-⑦



■ 岩崎における製糸工場、水車の分布-⑧

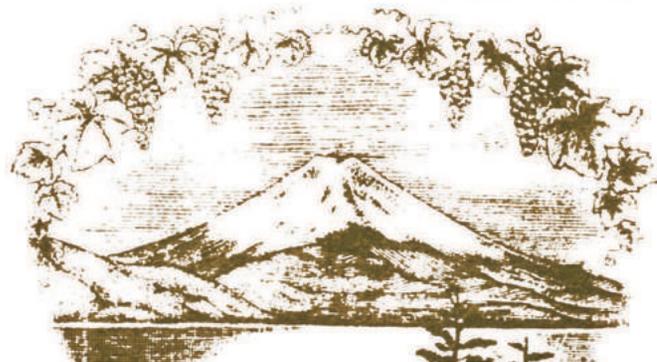


■ 蚕飼育農家数(左)と桑園面積(右)の変遷-⑨  
(折れ線グラフ:山梨県 棒グラフ:勝沼町)

■ 勝沼地域における旧村ごとの製糸工場数の変遷-⑩

	祝村	勝沼村	等々力村	菱山村	合計
明治28年(1895)	11	4	-	-	15
明治31年(1898)	9	3	-	-	12
明治40年(1907)	7	1	-	-	8
明治42年(1909)	5	1	1	-	7
大正元年(1912)	4	1	1	-	6
大正5年(1916)	4	1	1	-	6
大正12年(1923)	15	3	2	1	21
昭和4年(1929)	11	4	3	1	14

## 甲州純粋生葡萄酒



日川南側の岩崎でワイン醸造が本格的におこなわれるのは、明治10年(1877)の大日本山梨葡萄酒会社が誕生してからである。明治21年(1888)にはその後継として甲斐産葡萄酒醸造場(のちの大黒葡萄酒株式会社=宮光園)が開業した。大正3年(1914)には山梨県内の醸造免許の3分の1がこの地区に集中するほど、ワイン醸造が活発になっていた。

岩崎から始まったワイン醸造は、ブドウ畑の拡大と併せて地域に広がった。昭和恐慌の後には、ブドウ農家が個人で醸造免許を取得してワイン醸造をおこない、日常の飲み扶持としてのブドウ酒が根付いた。戦時中には酒石酸採取を目的に免許の集約化が図られ、地縁による共同醸造(ブロックワイン)がはじまる。ブロックワインは戦後に会社組織に改組した。

勝沼地域には30件\*(平成30年現在)のワイナリーが集まり、今もなおその数を増やしている。

\*うち調査対象範囲のワイナリーは19件。

## 寺院を中心とするワイナリー

柏和葡萄酒は、昭和15年(1930)に勝沼第1区醸造組合として設立された。その後、昭和29年(1954)に会社名義に書き換えをおこない、現在は大善寺を中心として周辺の地域住民26軒によるワイナリーである。

自家消費を前提としているためラベルなどは付けられず、現在でもブロックワインの伝統を色濃く残すワイナリーといえる。白ワイン用原料として甲州種、赤ワイン用原料としてマスカット・ベリーAが使われている。

各地区の参加農家からの持込によって、地区ごとに異なる日に仕込みをおこない、それらは別タンクで醸造される。醸造したワインについては一升瓶などへの瓶詰めをおこなったうえで、ブドウの持込量を基準として、そこから税金と材料費に相当する分を引いた分量が各世帯に配分されるという仕組みである。

各世帯に配分されたワインは、自家消費のほか、贈答品(御歳暮など)としての利用も多いという。また、一部は大善寺でも参拝者に提供されている。



■ 大善寺本堂—①



■ 柏和葡萄酒 醸造工場—②

## 和風建築のワイナリー

ワイン産業が始まった頃は、養蚕民家や日本酒醸造施設の転用により、醸造をおこなっていたことから、和風建築を残すワイナリーがある。これは、フランスから導入したワイン産業が、勝沼地域の地場産業として定着したことを物語る、他の生産地にはない特徴である。伝統的な主屋は事務所・売店として、土蔵や養蚕主屋はセラーとして使われている。くらむぼんワインは、市外で養蚕民家として使われていた主屋を大正9(1920)に移築し、現在は売店兼事務所として使用されている。ワインのセラーは地上と地下に分かれており、地下には2部屋がある。奥は主屋と同時期に造られ、かつては水路から取水した水を池に貯め、水流で冷却することでブドウ冷蔵庫としていた。手前は当時の社長が若い頃に自ら掘ったといい、当初からワイン貯蔵を目的にしたものである。



■ ブドウ冷蔵庫を転用した地下セラー③ ■ くらむぼんワイン④



■ 勝沼醸造⑤

勝沼醸造は、「有賀縦糸工場」として製糸業を営む傍ら、昭和12年(1937)から個人でのワイン醸造を始めたことによる。現在、明治後期に建てられた伝統的な主屋をワインショップとして使用している。



■ 蔵を活かした原茂ワイン⑥

原茂ワインの主屋は、切妻造棧瓦葺屋根に越屋根を設けた養蚕民家の典型で、明治17年(1884)に建てられた伝わる。その後、大正13年(1924)に養蚕業からワイン醸造に生業を改めた。

## 立地を活かしたワイナリー

江戸時代には宿場町であった甲州街道沿いには、マルサン葡萄酒、勝沼第八葡萄酒、麻屋葡萄酒、中央葡萄酒が点在する。そのほとんどは、戦中から戦後にかけて地域の自治組織としての区などを単位とした共同醸造、いわゆるブロックワインを由来とする。マルサン葡萄酒は観光ブドウ園である若尾果樹園とともに若尾家が営むワイナリーである。江戸時代には勝沼宿の脇本陣であり、明治時代になると電話交換局等を営み、ブドウ栽培もおこなっていた。ワイン醸造は昭和10年(1935)頃に始めた。現在の勝沼小学校グラウンドにあった畑でアンズ栽培もおこない、ジャムを製造して三越などの百貨店にも納品していた。甲州街道沿いという立地の利点を活かした、多角的な経営スタイルと運営が近世から続いていることに特徴がある。



■ 観光ブドウ園を併設(マルサン葡萄酒)⑦ ■ アンズジャムのラベル(マルサン葡萄酒)⑧



江戸時代の勝沼宿は、甲州街道有数の規模を誇る宿場町であり、ここでのひとの往来はブドウ産地としての「勝沼」の名を世に広めることにつながった。

さらに、明治時代から戦後にかけて、勝沼地域では東京方面の都市部とを結ぶさまざまな交通インフラが整備されていった。中央本線開通及び勝沼駅開設、新笹子トンネル（新笹子隧道）開通、勝沼バイパスや中央自動車道の整備などである。

鉄道開通はブドウ、ワイン輸送の迅速化と出荷圏の拡大につながった。また、トンネル開通を含む道路網の整備は、戦後のモータリゼーションの進展も相まって、「ブドウ狩り」を目的とする観光客を増加させ、観光ブドウ園の増加をもたらした。こうした流通往来の展開は、「ブドウ郷」としての勝沼イメージの確立とも少なからず結びついており、現在の景観を形成する基盤となっている。

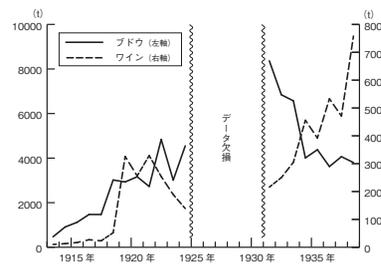
## 交通インフラの発達

ブドウ・ワイン等の流通を考えるうえで、明治36年（1903）の中央本線延伸（大月駅－甲府駅）が果たした役割は大きい。この鉄道開通には、笹子隧道、大日影隧道など複数のトンネル掘削が不可欠であり、高度な土木技術が求められた。工事に必要な大量のレンガ需要に応えるため、地域にレンガ工場も造られた。焼成されたレンガは、鉄道だけではなく、建築等にも使用されており、鉄道工事が多方面に影響を与えた。

鉄道延伸当初は勝沼地域には駅がなかったが、出荷需要もあり、大正2年（1913）に勝沼駅（現・勝沼ふとう郷駅）が開業し、出荷物を駅に運ぶための道路や橋が整備された。その後、戦後に輸送の主力がトラックに代わるまで、勝沼駅から発送される貨物量は増加の一途をたどった。



■ 勝沼駅プラットフォーム（大正時代頃）①



■ 勝沼駅のブドウ・ワイン発送量の変遷②



■ 出荷物の運搬に使われた祝橋③



■ レンガ積の旧田中銀行土蔵④

# 観光資源としてのブドウ

ブドウを対象とした観光は、「ブドウ遊覧」というかたちで明治時代にはじまる。ブドウ畑は生産空間から“見物”“遊覧”の対象としても位置づけられるようになり、いくつかの観光ブドウ園が開園した。

昭和33年(1958)の新笹子トンネル(新笹子隧道)整備は、勝沼地域のブドウを資源とした観光を加速させるものであった。トンネル開通後、観光消費・ブドウ消費の拡大を目的として、昭和36年(1961)から一般農家がブドウ園を開放する“露地のブドウ狩り”が実施された。この取り組みが好評を博し、ブドウ園に京浜方面の団体・会社との契約が生まれたとされる。こうして、ブドウは遊覧の対象から「狩る」対象へと広がり、勝沼地域の観光地化も進行していった。

その後、1990年代になると、ワイナリーを訪れる観光に旅行者のニーズが生まれはじめる。そのなかで、和風建築のワイナリーがその特徴を活かして売店等を整備する、あるいはワイナリーがレストランなども営むといった動きも地域ではおこっていた。



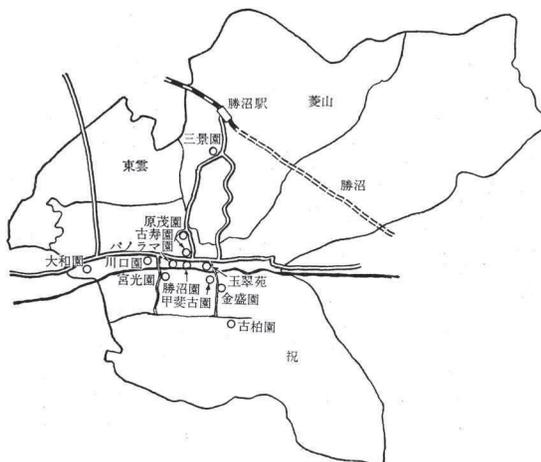
■ 観光客による車両動線と観光ブドウ園の敷地配置⑧

観光ブドウ園では、観光客の自動車での動線を意識し、動線上からみえやすいよう進行方向奥側に売店を、手前側にブドウ棚兼駐車場を配することが多い。

原色を積極的に用いた看板掲示などにとどまらない集客上の工夫が空間配置に読み取ることができる。



■ 甲州街道沿いの観光ブドウ園⑤



■ 戦前の観光ブドウ園の広がり⑥



■ 戦後の観光ブドウ園の広がり(昭和43年)⑦



勝沼地域は、気温の日較差が大きく、降水量が少ない内陸性盆地気候、東側の峠から吹き込む冷温の局地風「笹子おろし」などの影響で、昼夜の寒暖差が大きく、ブドウ栽培に極めて適した条件をもつ。扇状地ゆえに起伏に富んだ地形であり、礫を多く含んだ水はけのよい土壌をもつ。こうした条件がセギと呼ばれる水路を発達させたほか、土地・敷地利用などを制約し、生活・生業空間の使い方を規定した。

さらに、東京などの都会の消費地からの甲府盆地の東の玄関口に位置し、かつ都会の近郊に立地するという条件は、ブドウ・ワインの流通、観光客等のひとの往来にとって重要な役割を果たした。こうした自然・地形・立地等の条件を巧みに活かし、都会の消費者との関係性や動向を常に意識し、その影響を受けながら形成されてきたのが、「勝沼のブドウ畑及びワイナリー群の文化的景観」である。

## 価値 I：人と物の往来が生み出した 日本一のブドウ郷

近世の勝沼宿では土産物としてブドウの生産と販売がおこなわれた。明治に入ると、鉄道網・道路網の整備とともにブドウ・ワインの出荷体制等も整い、ブドウは勝沼の名産品として全国に知れわたるようになったが、これには一大消費地である江戸・東京と近いことも影響していた。明治に開通した鉄道は、それまでの主要道であった甲州街道に沿って敷設されたため、いずれの交通手段でも勝沼は甲府盆地の玄関口であった。ブドウ郷の繁栄は、江戸時代からの勝沼地域の「地の利」によって支えられてきた。

## 価値 II：扇状地の地形を巧みに 利用した生活と生業

勝沼地域は盆地の縁辺に位置し、扇状地にも由来して、土地は東西・南北両方向に緩やかに傾斜する。水はけのよい地質条件はブドウ栽培の適地となったが、灌漑・生活用水の確保が求められた。そのためにセギが張り巡らされ、日川等からの水を巧みに配した。セギで潤された田畑は、その後、合筆され大きな畑となり、ブドウ棚が掛けられた。ブドウ棚の大きさはさまざまで、葉の色も品種によって異なるため、一面のブドウ棚の風景は「パッチワーク」と表現される。このパッチワークを生んだのが、扇状地のような傾斜地を制したセギの存在である。

## 価値 III：伝統の継承と時代への即応性を 併せもった生業の持続と展開

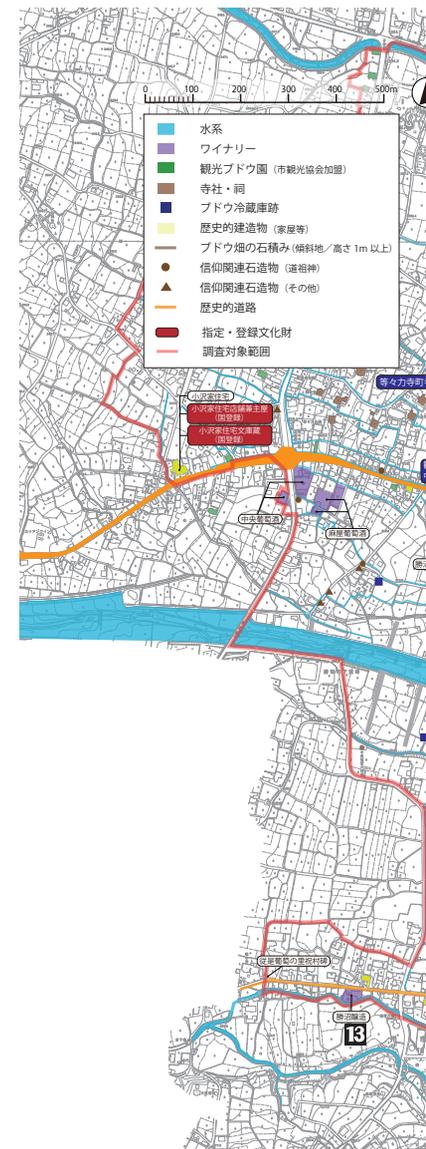
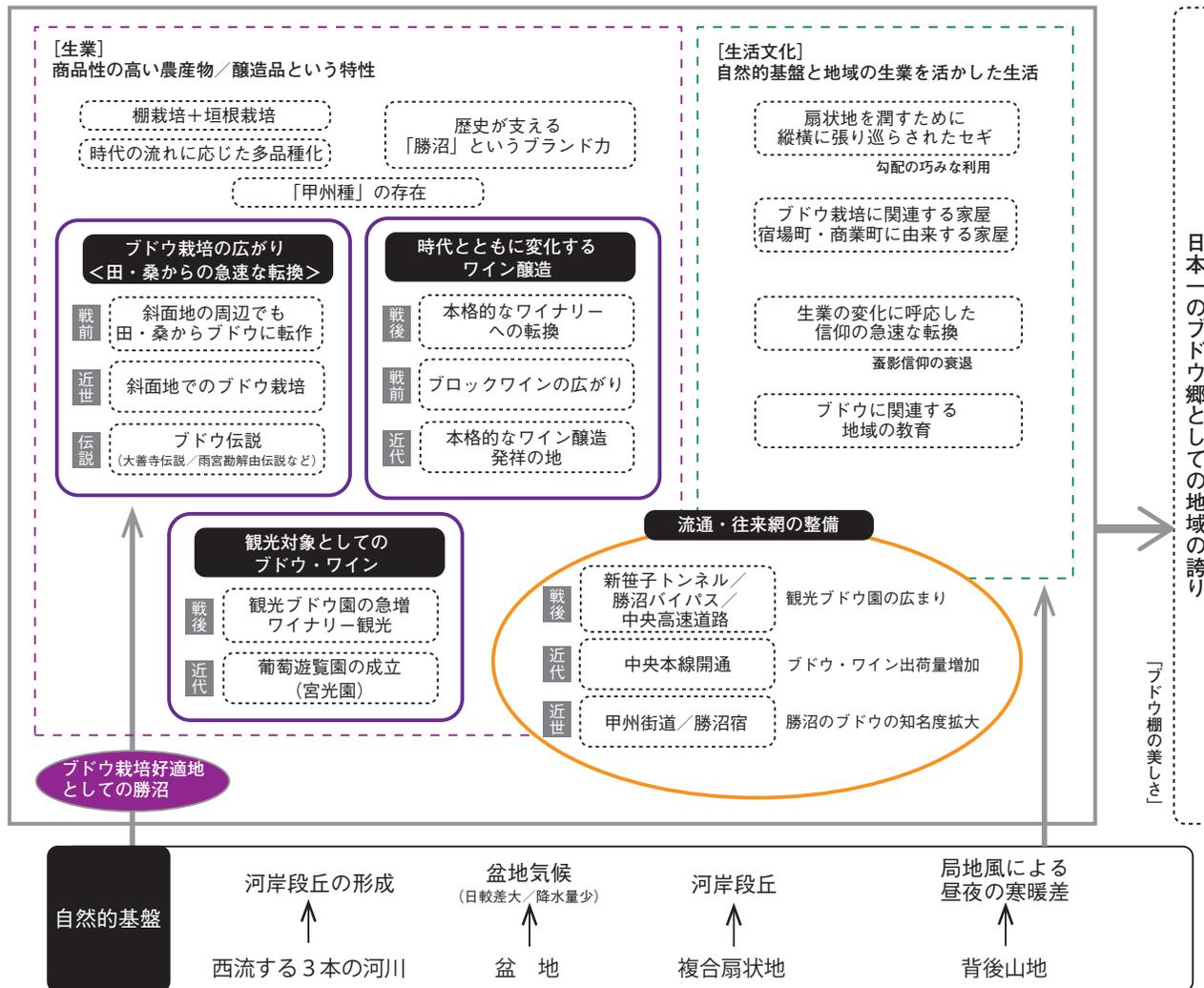
近代以降、殖産興業政策によって水田の多くは桑畑に転換されたが、勝沼・岩崎地区ではブドウ畑となり、次第に拡大していった。ブドウは竹を使った棚で栽培されていたが、竹から針金に代わったことにより、棚の架け替えなどの手間が軽減されるとともに、ブドウ畑のさらなる拡大につながっていった。

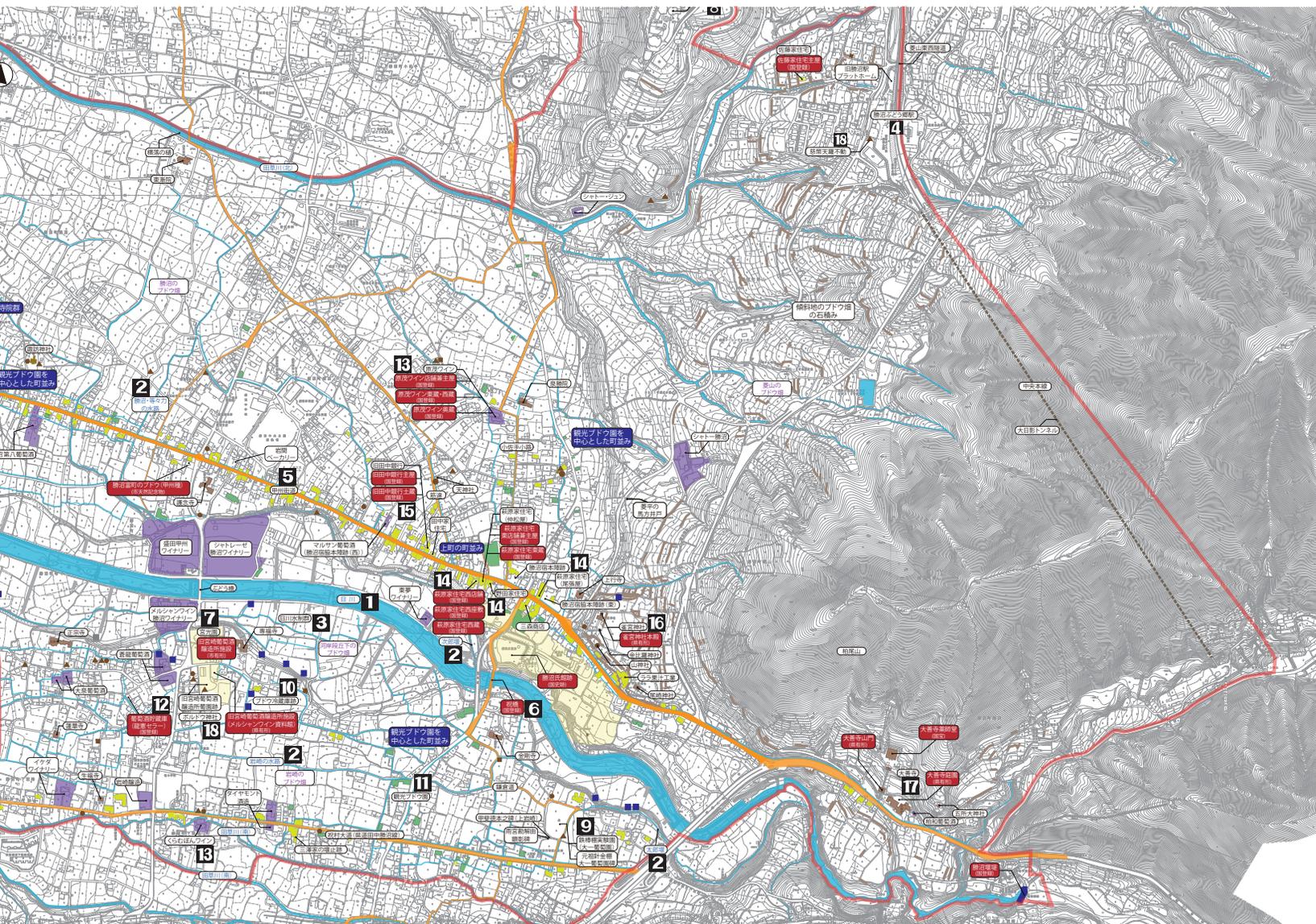
日本ワイン誕生の地である勝沼地域のワイン産業は、時代の情勢に翻弄されながらも柔軟に対応し、醸造が始まってから一度も休むことなく続けられてきた。それは、単に「地の利」によるものではなく、ワイン産業に係わった方々の「矜持」ともいえるものであろう。



甲府盆地に広がるブドウ畑。穏やかに日川が下り、甲州街道が通るー①

■ 文化的景観の価値の見取り図②





■ 勝沼のブドウ畑及びワイナリー群の文化的景観 景観構成要素位置図③



詳細はこちらから  
ご覧ください。

# 文化的景観をかたちづくる特徴的なもの

ひかわ・にっかわ

## 1. 日川

勝沼地域の中心を西流する河川。川の両岸には河岸段丘が形成され、段丘上には甲州街道や集落、ブドウ畑が、また段丘下には明治40年代の水害後、水制等により復された土地に形成されたブドウ畑が広がる。



## 2. セギ

日川などから取水された水は、セギと呼ばれる水路を經由して、地域全体にもたらされる。地形の高低差を巧みに利用して配置されており、道路沿いなどに加え、家の敷地、畑の中なども流れる。扇状地において、農業用水や生活水の確保に重要な役割を担ったほか、近代には製糸工場の水車の動力源としても利用された。



## 3. 水制

明治40年(1907)の大水害をふまえ、明治44年(1911)～大正4年(1915)に国直轄事業として造られた。川に並行する頭部と、頭部中央に直角に取りつく幹部からなる、T字を呈する石張りの堤防で、荒れた河川の川筋を整えるのに絶大な効果があった。現在はその機能を果たし、ブドウ畑の中に幹部上面の石張りがみえる。



## 4. 勝沼ぶどう郷駅

中央本線は、明治36年(1903)に大月～甲府間が段階的に開業した(勝沼駅は大正2年(1913)開業)。鉄道開通により、ブドウ・ワインなどの輸送環境が飛躍的に向上した。周辺には、大日影トンネル等、勝沼・塩山地域で焼成されたレンガを使用したトンネルが現在も受け継がれている。



## 5. 甲州街道

江戸幕府によって整備された五街道のひとつ。勝沼付近からは甲府方面に向けて緩やかに下る。勝沼では沿道に勝沼宿が設けられ、近代以降観光ブドウ園なども開園した。



## 6. 祝橋

昭和6年(1931)に架けられた3代目の祝橋は、それまでの吊橋からコンクリートアーチ橋となり、日川以南のブドウを勝沼駅(当時)まで車で運搬できるようになった。現在は遊歩道として活用されている。



国登録有形文化財

## 7. 宮光園

市指定有形文化財

日本のワイン産業黎明期の遺構「旧宮崎葡萄酒醸造場」で、宮崎光太郎が明治25年(1892)に自宅に開設した。宮崎はワイン醸造のかたわら、自社のブドウ園や醸造場の見学に鉄道を使うなど、現在に通じる観光事業を始めた。宮光園は醸造場と観光ブドウ園の総称で、主屋、離れ座敷、白蔵が整備され、見学・学習に活用している。



## 8. 勝沼ぶどうの丘

昭和50年(1975)に自然休養村整備の一環として勝沼町宮ぶどうの丘文化センターとしてオープンした観光施設。ワインが町外で消費される契機ともなった。なお、一帯は思蓮山と呼ばれ、斜面にはブドウ畑が形成され、デラウェアが多く栽培されている。



## 9. 鉄棒棚実験園

明治12年(1879)、兩宮作左衛門がブドウ棚を鉄棒で作る実験をおこなった。元祖針金棚大葡萄園碑が残る。また、大正11年(1922)には当時の東宮(のちの昭和天皇)がブドウ観覧に訪れており、宮光園作成映像にはそのときの様子が記録されている。



## 10. ブドウ冷蔵庫

大正～戦前にかけてブドウ(特に甲州種)の長期保存を目的に造られた天然の冷蔵庫。河川周辺に設置されたものは地下水で冷却し、それ以外の地域のは水路を回して冷却するものなどがあつた。



## 11. 観光ブドウ園

高度経済成長により、ブドウなど果物が食卓に上がる機会が増えた。また、トンネル開通などの道路網の整備と家庭への自動車の普及が進むと、レジャーとしての観光ブドウ園が目立ってきた。はじめは甲州街道に軒を連ね、その後甲州街道から離れ大型化が進んだ。



## 12. 龍憲セラー

国登録  
有形文化財

ヨーロッパの貯蔵技術を導入してつくった国内最初期の煉瓦造の半地下式葡萄酒貯蔵庫。建設に尽力した土屋龍憲の名をとって「龍憲セラー」と呼ばれている。



## 13. 和風建築のワイナリー

養蚕や製糸業などに由来する建築、あるいは土蔵などを転用して営まれているワイナリー。こうしたワイナリーが勝沼地域には数社あり、特徴ある建物もワイナリーのブランドにつながっている。



写真：勝沼醸造

## 14. 甲州街道沿いの民家

江戸時代には宿場町、その後は商業で賑わった甲州街道沿いには、旅籠、金融業、ブドウ栽培業などで栄えた。現在でも、その特徴を残した商家建築が受け継がれている。



## 15. 旧田中銀行博物館

国登録  
有形文化財

明治30年代に勝沼郵便電信局の局舎として建築。明治35年(1902)まで郵便電信局局舎、大正9年(1920)に山梨田中銀行社屋として使用。現在は公開施設として活用されている。



## 16. 雀宮神社

本殿  
市指定  
有形文化財

推古18年(610)に天橋立から勧進されたかつての勝沼村の氏神。勝沼中学校グラウンド建設に伴い、昭和40年(1975)に移転した。秋の「かつぬまぶどうまつり」にあわせて、例祭が行われ、甲州街道などを神輿が渡御する。



## 17. 大善寺

本堂  
国宝

寺記によると、養老2年(718)に僧行基が開創したと伝わる。甲斐源氏をはじめ歴代の武田家の手厚い保護を受けた。「葡萄薬師如来」の伝説があり、甲州ブドウ発祥の地とも伝わる。



## 18. 慈弊天羅不動・ ボルドウ神社

慈弊天羅不動は、デラウェアの普及により養蚕業からブドウ栽培に転換したことを受けて造像され、JAフルーツ山梨菱山支所脇に安置されている。ボルドウ神社は、大正時代に宮光園主・松本三良が、病虫害からブドウを守るボルドー液(消毒液)に感謝して祀ったもので、いずれもブドウ郷ならではの祀り方である。

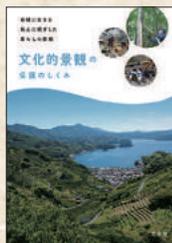


# 文化的景観とは

「文化的景観」とは、土地にひとが暮らし、生活や仕事を営むなかで、地域の自然や地形を巧みに利用したことにより生み出されてきた景観のことをいう。

山間や海辺の農山漁村、あるいは町場の商家町など、身近にある何気ない景観すべてが私たちの生活の記憶であり、大切な文化的景観である。

地域固有の自然や文化のなかで育まれてきた景観、さらにそれを形成してきた地域のシステムに価値を見だし、地域で守り、受け継ぐための仕組みが、国の文化財のひとつとしても位置づけられている「文化的景観」である。



『地域に生きる風土に根ざした暮らしの景観 文化的景観の保護のしくみ』(文化庁、2019年)



詳しくは [文化的景観](#) [文化庁](#)



遊子水荷浦の段畑(愛媛県)  
海辺の急峻な段々畑にじゃがいも畑が広がり、半農半漁の営みが続く。



酒谷の坂元棚田及び農山村景観(宮崎県)  
棚田の周辺には、肥杉杉林が広がる。林業・農業のかかわりが土地利用にも現れる。



大沢・上大沢の間垣集落景観(石川県)  
海沿いの集落では、ニガタケを立てた「間垣」を設置し、季節風をしのいでいる。

## 図版出典

- 2～3頁 ①山梨県立大学農水研究室作成(ベースマップ:20万分の1地質図幅「甲府」(尾崎正紀ほか、産総研地質調査総合センター、2002年) ②山梨県立大学農水研究室作成(ベースマップ:国土地理院電子地形図「塩山」「石和」) ③④気象庁データをもとに作成
- 4～5頁 ①②山梨大学菊地研究室撮影 ③山梨大学菊地研究室作成(ベースマップ:甲州市都市計画図白図)
- 6～7頁 ①④⑤⑥⑦⑩山梨大学菊地研究室撮影 ③『勝沼町誌』所収図版を一部改変  
②⑧⑨⑩甲州市教育委員会撮影
- 8～11頁 ①有限会社マルサン葡萄酒所蔵 ②勝沼町文化協会編『写真で見えるさと勝沼』勝沼町、1998年所収 ③山梨大学菊地研究室撮影 ⑤山梨大学菊地研究室作成(ベースマップ:旧版地図(日本帝國陸地測量部及び国土地理院刊行)) ④⑧山梨大学菊地研究室作成(ベースマップ:甲州市都市計画図白図) ⑥甲州市教育委員会所蔵 ⑦甲州市教育委員会撮影 ⑨『山梨農林水産統計年報』各年度版をもとに山梨大学菊地研究室作成 ⑩『全国製糸工場調査表』第1次～第9次、『全国製糸工場要覧』昭和3年度をもとに山梨大学菊地研究室作成
- 12～13頁 ②③⑦山梨大学菊地研究室撮影 ①④⑤⑥甲州市教育委員会撮影 ⑧有限会社マルサン葡萄酒所蔵
- 14～15頁 ①甲州市教育委員会所蔵 ②『勝沼町誌』所収資料をもとに山梨大学菊地研究室作成 ③⑤山梨大学菊地研究室撮影 ④甲州市教育委員会撮影 ⑥⑦中山美恵子「勝沼町における観光農業」『観光地理研究』明玄書房、1968年所収 ⑧山梨大学菊地研究室作成(ベースマップ:国土地理院地理院地図空中写真)
- 16～19頁 ①甲州市教育委員会撮影 ②山梨大学菊地研究室・甲州市教育委員会文化財課作成 ③山梨大学菊地研究室・甲州市教育委員会文化財課作成(ベースマップ:甲州市都市計画図白図)
- 20～21頁 ①②③④⑤⑥⑨⑩⑪⑫⑬⑭⑮山梨大学菊地研究室撮影  
⑦⑧⑯⑰⑱甲州市教育委員会撮影

令和2年3月9日 発行

## 勝沼のブドウ畑及びワイナリー群の文化的景観 調査報告書 概要版

編集 甲州市教育委員会文化財課

発行 甲州市・甲州市教育委員会

〒404-8501 山梨県甲州市塩山上於曾1085番地1

電話: 0553-32-5076

表紙  
デザイン 岩田 美耶

本書は、『勝沼のブドウ畑及びワイナリー群の文化的景観調査報告書』(甲州市・甲州市教育委員会 2019)の概要版であり、国及び県の補助金を得て刊行するものである。